

現代社会と『韓非子』：教育・新聞・ビジネスに現 れる『韓非子』を見る

横山, 裕
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/2328435>

出版情報：哲學年報. 57, pp.1-14, 1998-03-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

現代社会と『韓非子』

—教育・新聞・ビジネスに現れる『韓非子』を見る—

横 山 裕

はじめに

「なぜ古典を研究するのか」という問いに対して古典を研究する多くの研究者は自分なりの解答を持って日々研究に従事している。この自分なりの解答は或いは信念や哲学とも言うことができよう。したがって、先の問いに対する絶対の解答というのは存在しない。しかしながら、昨今の学界をとりまく風潮を見ると「絶対の解答」を出来るだけわかりやすく明らかにするように求めているように思われる。なぜならこの「絶対の解答」は古典研究の意義に他ならないからである。筆者は『韓非子』を研究対象とするので、本稿では『韓非子』研究の「絶対の解答」を見つける一つの手だてとして現代社会と『韓非子』の関係について考察してみたい⁽¹⁾。具体的には教育・新聞・ビジネスで言及される『韓非子』を考察対象としてどのように扱われているか、取り上げられる篇あるいは思想内容に特徴はあるか、また、扱われ方や特徴に現代的な要因があるのか等について考察し、『韓非子』の現代的意義といったものを考えてみたい。

1 教育に現れる『韓非子』

学校教育で『韓非子』の名称を見るのは主に国語の古典及び社会の歴史及び倫理である。なかでも史実だけでなくその内容に触れるのは国語の古典である⁽²⁾。そこでまず、中学及び高校の教科書にどのくらい『韓非子』は取り上げられるのか、何篇が頻出するのかを以下にまとめて、そこから『韓非子』がどのように捉えられているのか見てみたい。

中学校の国語教科書における漢文教材の一覧は、吉田美和氏の研究「中学校

国語教科書における漢文教材一覧」によって知ることができる。⁽³⁾吉田氏の研究によると、『韓非子』は終戦後の昭和二十年半ばから平成元年までに一年生用の教科書に17回、二年生用に14回、三年生用に1回収録されている。一、二年生用に多く収録され三年生用に一回しか収録されないのは、三年生では古典鑑賞が単元目標であり漢詩や『論語』を主に教えるからである。逆に言う『韓非子』は教材としては鑑賞の対象ではなく、古典が典拠となり現代でも使用される言葉、つまり故事成語を学習し、古典と現代の接点を認識させることにある。したがって一年二年で合計31回『韓非子』は登場するが実に29回は「矛盾」の説話であり、残りの2回が「守株」の説話である。確かに、「矛盾」という言葉は故事成語であることを意識させないほど現代では一般的な語彙であり、それが二千年前の書物から生じた言葉であることを学習することによって古典への興味を喚起させることは古典学習のあり方としては正鵠を得ている。しかしながら、「矛盾」という言葉がたまたま『韓非子』を出典としているので『韓非子』の名称が出てくるだけであり、その思想には詳しくは触れられていない。したがって、中学生が『韓非子』について何かしらのイメージなり考えを持つことはないと思われる。

それでは、次に、高等学校の古典の教科書を見てみる。⁽⁴⁾高校では国語一、国語二、古典一、古典二でいわゆる漢文を教えるので、そこに『韓非子』は見える。すぐに見ることの出来た十社の⁽⁵⁾最近2年間の教科書を見るとそれぞれの教科書に1ないし3つの話がそれぞれ収録されている。収録されている篇は、五蠹篇と二柄篇がそれぞれ6、外儲説（左右上下の4篇を併せて）と説難篇がそれぞれ5、以下、心度篇2、難篇、喩老篇、十過篇、説林篇がそれぞれ1となっている。

多く採用されている五蠹篇、二柄篇、外儲説、説難篇のうち、五蠹篇と説難篇は『史記』の韓非列伝に韓非の自著として挙げられていて『韓非子』の中心思想を伝える篇として教科書に収録されるにふさわしい篇である。外儲説はいわゆる古代中国の説話集というべき性格の篇であるから、自ずと収録される数が多くなったと考えられる。注目すべきは二柄篇である。先述したように6冊

の教科書が二柄篇から文章を収録しているが、その文章はすべて「韓の昭侯がうたた寝をしたときに冠係が昭侯に上着をかけたが、目覚めた昭侯は職務を怠った着物係だけでなく冠係までも越権行為として処罰した」という侵官之害の説話である。この話が多く収録されるのは、学生が比較的身近な状況に置き換えて理解可能だからという理由と、『韓非子』の主要なテーマである「刑名参同」が端的に描かれているからであろうが、これによって教科書の執筆者が『韓非子』理解には「刑名参同」の理解が不可欠であると考えていたことがわかる。多くの学生は教科書以外で『韓非子』の原典を紐解くことはないと思われるので、『韓非子』即ち「刑名参同」というイメージが定着して次世代に伝えられていくのであろうが、江戸時代から時間を超えて日本人が同じ『韓非子』観を持つという共通性の創造も教育の目的であろう。

では、侵官之害以外にはどのような説話が多く収録されるか見てみると、説難篇の「昔者鄭の武公胡を伐たんと欲す」の一段が4教科書に収録され、外儲説（左上）の「鄭人に且に履を買わんとする者あり」の一段が3教科書に収録されている。説難篇の説話は事態の状況を理解すること以上に理解した後どのように行動するかが難しいことを示唆する説話である。抽象的な徳目の理解を標榜する他の思想家とは異なり、極めて具体的な実際の状況で具体的な行動としての正しい判断を追求する主張は、崇高な理想や理念を唱える書物とは一線を画しいわば処世術に通じるものである。外儲説の説話は、大切なのは過去の基準に拘束されることなく現実を直視して対策を立てることであり、『韓非子』が現実主義の書であることを如実に示す説話である⁽⁶⁾。他の諸子百家は先に自己の理念や理想が在ってそれを社会に認めさせようとするので主張に抽象的な観を免れ得ないが、『韓非子』は自国の衰退が眼前にありその対策として書かれたという事情から極めて現状分析に詳しく現実主義的なのである。説難篇の説話も外儲説の説話も『韓非子』の実用性、現実重視といった特徴を端的に語るものであるが、この二つの説話が収録されたのは先述した二柄篇の侵官之害と同様に教科書の執筆者が『韓非子』理解の代表的な要素として実用性と現実重視とを考えていたことの現れである。そうすると、日本人は高校の段階で

は『韓非子』について「刑名参同」の書、処世術に通じる書、現実重視の書、という共通の理解が創出されることになる。これらは江戸時代に漢学者が考えていた『韓非子』観とほぼ一致するものである。教育の目的の一つが文化的価値観の伝承と共有であるならば、『韓非子』においては成功していると言えよう。ただ、ここでほぼと言うのは処世術に通じる書というイメージは江戸の漢学者は持っていないからである。この問題については後章で詳しく論究することにする。

2 新聞記事に現れる『韓非子』

新聞記事は我々が日常最も目にする活字媒体の一つである。生活に密着している点と新聞記事が現代社会を反映している点とを考えると、そこに『韓非子』がどのように取り上げられるのかを考察することは現代社会と『韓非子』を理解する糸口の一つになると思われる。以下、過去の記事に現れた『韓非子』の名称を拾って考察してみる。今回はコンピューターオンライン検索の便宜上、毎日新聞、読売新聞、産経新聞（以上1994・7・1～1997・10・14に掲載された記事）及び朝日新聞（1985・1・1～1997・10・14に掲載された記事）を対象とした。

以上の4新聞のデータベースで『韓非子』を検索すると、毎日新聞7件、読売新聞1件、産経新聞5件、朝日新聞7件の記事がヒットする。その内、著作権の関係上、表示されない記事が2件あって実際に見ることの出来た記事は18件であった。その18件の記事の内訳は次のようであった。

記事内で引用として現れるもの	9件
記事内で引用以外で現れるもの	4件
その他（連載小説中や書籍紹介の広告など）	5件

記事内で引用されたものを篇別に見てみると、外儲説（左右上下の4篇を併せて）、内儲説（上下2篇を併せて）、説難篇がそれぞれ2件、解老篇、十過篇、六反篇がそれぞれ1件である。この他、連載小説中で引用された喩老篇、大体篇それぞれ1件を見てみても先に見た教科書のような偏りはない。引用される文章も教科書に収録されている話と重なるのは説難篇の「逆鱗」のみである。

これは、教科書には『韓非子』の性格の如実に現れていて学習に容易な説話が収録されるのに対して、新聞記事での引用は記事執筆者が文章構成の都合で恣意的に行うので統一性が無く多篇に及んだと考えられる。このことは、『韓非子』が説話・故事の宝庫であることの証明でもある。では、新聞記事に引用される『韓非子』に何も共通項が見出せないかといえばそうではない。新聞記事には、政治、経済、文化、社会、スポーツなど色々なジャンルがあるが、『韓非子』の引用は政治、経済関係記事に集中する。引用記事9件中、政治関係記事に引用されるのが4件、経済関係記事が2件である。例えば、毎日新聞(97・4・21)の記事では北朝鮮の現状から連想するとして「秦大いに飢う。」(外儲説右下)が引かれ、⁽⁷⁾また朝日新聞(89・3・15)の記事では首相の政治的決断を求める文章で「政を為すは猶お沐するがごとし」(六反篇)が引かれている。このことから『韓非子』の政治性の高さをあらためて窺うことができ、現代に通じる古典であることを再認識させられる。

文化面に見ることの出来る『韓非子』は、中国古典の他書と並列で言われたり、書籍の名称の一部であったりして特に現代社会での位置づけや関連などは窺うことが出来ない。ただ、産経新聞(96・6・6)の書評欄で宗像紀夫氏(大津地検検事正)は『諷論の詩人 白楽天』(山口直樹著)の書評の導入部分で次のように述べているのが注目される。

「『韓非子』等には現代を生き抜くための諸々の知恵がふんだんに詰まっているように思う。日頃我々が使っている四字熟語のほとんどは中国の古典に源を發しているのである。だから、我々は中国の文献を学ばなければ、言葉の本当の意味を正しく理解することなどできないのである。」

宗像氏は『韓非子』などとしておられるが、『韓非子』以外の書物の名を出してはおらず、『韓非子』を現代社会を豊かにとか平静にではなく「生き抜くため」としていることから『韓非子』制作の根本である厳しい現状を打破して生き残るという性格が受け継がれていることが窺える。また、言葉の典拠であり言葉の正しい意味を理解するための考証学的価値を『韓非子』に認めるのも『増読韓非子』で蒲坂圓が指摘した⁽⁸⁾ことと同じである。宗像氏が『増読韓非子』に目

を通じたことがあるかどうかは定かではなく、また一人の記事から多くのことを語るのは科学的ではないが、宗像氏の記事から日本人が『韓非子』の根本精神を理解し今日まで伝えていること及び江戸と現代で『韓非子』について同じ価値を認めていたことが窺える。

新聞記事では教科書と違って多くの篇が執筆者の思惑で引用され、定番と目せる篇は存在しないが、引用される分野は政治と経済に集中することから現代社会が『韓非子』を政治と関連性が高いものとして見ていることがわかる。また江戸時代の漢学者が『韓非子』を生き残りの書あるいは言葉の典拠としていたが、その認識が現代にも継承されていることを確認することができる。

3 ビジネスに現れる『韓非子』

現代日本社会を一言で定義するのに適当な言葉として資本主義経済の社会であると言うことができる。要はビジネスである。それでは、ビジネスと『韓非子』はどのような関連を持つのであろうか。本来ならばビジネスの現場、例えば商談などにおいて『韓非子』がビジネスマンたちに言及されるか否かの調査をしなければならないが、その術を持ち合わせていないので、教科書や新聞と同じように紙媒体に現れる『韓非子』からビジネスにおける『韓非子』について考察してみる。

『韓非子』の名を冠して出版される書籍は、丸善株式会社の和書・商品情報検索で検索すると54件がヒットする(97・10・15現在)。その内、研究書や訳注といった学術書をのぞいた所謂ビジネス書に該当するものが14冊である。この14冊はなるほどビジネス書らしく例えば『韓非子入門～強者の管理術を現代に活かす』であるとか『韓非子の間人学～吾が為に善なるを恃まず』あるいは『韓非子・悪の管理学』といった錚々たるタイトルである。これらのタイトルだけ見てもビジネスの世界における『韓非子』のイメージが窺い知れる。管理術、強者、人間学、悪といったタームは『韓非子』の中心思想である「信賞必罰」や「刑名参同」或いは中国最初の統一者秦の始皇帝のイメージから出てきたものであることは想像に難くない。本来ならば、検索にかかった14冊の全てに当

たって考察を進めるべきであるが、14冊全てを手にすることが出来なかったため、今回はビジネス書の縮図であるビジネス雑誌の記事を中心に資料として考察を進めることにする。

学術書ではなく所謂雑誌を専門とする図書館に「大宅荘一文庫」⁽⁹⁾があるが、その目録によると1969年3月以降『韓非子』に言及する記事は特集記事1件を含み10件ある。10件という数字は、同じ目録で『論語』が215件あることに比べると極めて少ないと言える。『論語』が『聖書』や『コーラン』と並ぶ世界的な著述であることを考えると当然の差とも言える。

まず、ビジネス雑誌の記事がビジネス書とほぼ同じ性格を持つことは記事のタイトルの類似性から分かる。以下、10件のビジネス雑誌記事のタイトルを列挙してみる。

『韓非子』の創意と政治 『中央公論』 1969・3

『韓非子』の説難 『新潮』 1974・10

亡ぶべきなり 『韓非子』上下 『流動』 上1977・1 下1977・2

人間性悪の書 『韓非子』の読み方 『プレジデント』 1983・9

特集『韓非子』の人間学—畏敬されるリーダーの条件— 『プレジデント』
1984・6

名利に迷う「利のみで人は動く」と説いた『韓非子』の限界とその批判 『致知』 1989・6

『韓非子』読み継がれるその思想 『The Bigman』 1992・7

二千年を生き抜いた『韓非子』勝利の法則 『プレジデント』 1993・10

『韓非子』の帝王学 | 大競争時代のリーダーかくあるべし 『プレジデント』
1995・3

『韓非子』の教訓 『正論』 1995・3

性悪、勝利、帝王学といった言葉から雑誌の記事が言わんとする内容がビジネス書と同じであることがわかる。

これらの記事の多くが『韓非子』の説明を『史記』に基づいて行っていて『韓非子』観が『史記』の範疇を超えることはない。曰く、弱小国韓の公子であっ

た、荀子に師事した、韓の生き残り策を講じた、自国に認められなかった、始皇帝に認められた、友人李斯の陰謀で自殺した等。したがって、先述したビジネス書及びビジネス雑誌のタイトルから窺える悪、性悪、勝利、強者などは実は『韓非子』という書物そのものの直接抽出されたイメージではなく『史記』のフィルターを通して得られたことがわかる。悪や性悪は韓非が師事した荀子の性悪説からであろうし、勝利や強者は始皇帝からのものと考えられる。『史記』が韓非の列伝の中で荀子や始皇帝の名を挙げて『韓非子』と関連づけたことが、次第に『韓非子』のイメージとなっていったと考えられる。特に、始皇帝が韓非に会えたら死んでもよいと言って賞賛した故事は必ず引用され、それで特に勝利や強者、帝王学といったイメージで『韓非子』は見られるようになったと考えられる。

次に、記事の内容について詳しく見てみる。雑誌記事に五回以上引用される『韓非子』の篇とその回数は以下の通りである。

五蠹篇13回、説難篇9回、内儲説（上下の2篇を併せて）9回、

外儲説（左右上下の4篇を併せて）8回、二柄篇8回

ここで全てを引用して個別に考察を加えることは紙幅の関係上割愛するが、内儲説、外儲説の説話集からは特定の説話に偏ることなく引用されていて、教科書が「鄭人に且に履を買わんとする者あり」の一段を多く引いたような現象は見られない。五蠹篇は13回と多く引かれるが、五蠹篇は『史記』の韓非列伝に自著として挙げられ今日の研究でも『韓非子』の中心を為す篇であることは定説であるので当然の結果である。ただし、引用される決まった文章があると言うわけではなく、強いて言えば、『韓非子』の歴史観として「上古は道徳を競い、中世は知謀を逐い、当世は氣力を争う」の一段が2つの雑誌に引かれたり、「五蠹（国家にとって有害な5つの集団）」の説明の一段がやはり2つの雑誌に引かれるくらいである。そして、五蠹篇からの引用は『韓非子』の史実的説明の箇所や現状分析の詳細さや斬新さを指摘するものが多く、上述した内・外儲説と同様に、五蠹篇の引用からは現在言われるような一定のイメージを創出可能な要因は見つけることが出来ない。内・外儲説と五蠹篇はむしろあるイメージが

先にあつてその補助的な意味で記事中に引用されている感が否めない。それでは、ビジネス記事において一定のイメージを創出する役割を果たしている篇とは、例えば、それが9回引用される説難篇であり、8回引用される二柄篇である。

説難篇は『史記』の韓非列伝にほぼ全文が引用され、『韓非子』の中でも有名な篇の一つである。篇名の意味は「君主を説得することの難しさ」であり、篇全体が君主説得をいかにして行うかで貫かれている。臣下の切実な立場で書かれた篇の代表と言える。一方、二柄篇は『韓非子』の政治標題「信賞必罰」を行うに当たって、君主は賞罰の行使権を譲渡委任してはならないことを言い、同時に臣下の統御術を説く篇である。これは完全に君主の立場で書かれており、また具体性に富んでいる。『韓非子』は君主と臣下という異なった二つの立場から書かれた篇が混在し、この説難篇と二柄篇とはそれぞれを代表する篇である。江戸時代の漢学者達は、政治に有効な実用書として『韓非子』を捉えた。これは、当時の『韓非子』の対象読者が為政者に設定されていたからであり、また、漢学者たちも君主の立場に立って『韓非子』の有効性を考えた。したがって、説難篇などは古来有名な篇ではあるが、臣下の立場で書かれる篇については、政治的有効性、実用性を重視する視点ではあまり評価されなかった。例えば、蒲坂圓の『増読韓非子』の題言には、

書中上韓王者有之。故多感憤。秦人投時好而附益者有之。故多過激。使善讀者独執此術不用其心、則於治国乎何有。此諸葛亮何犇之所以各進其主也。

(『韓非子』中には韓王に上奏した部分がある。だから感情が高ぶったり憤っている篇がある。また秦人が当時の風潮に合わせて『韓非子』につけ加えた部分がある。だから内容が過激な篇がある。もしそういったことをしっかり分かった上で『韓非子』を読むことが出来る者が『韓非子』の説く術を用いて『韓非子』の感憤したり過激な部分を採用しなかったら国家統治において何も問題は生じないだろう。だから、諸葛公明や何犇が『韓非子』を君主に勧めたのである。)

とあつて、『韓非子』の読者は為政者であつて、『韓非子』の価値は国家統治に対する有効性が挙げられており、説難篇などのように臣下の立場で書かれた篇

は「感憤」であるとして為政者が採用しないことを勧めている。これは漢学者が『韓非子』の対象読者を為政者として考えていたからであり、『韓非子』を中国の戦国時代末期と同様に政治の書として認識していたからである。

一方、現代日本では『韓非子』の対象読者は、無論為政者もいるであろうが、大多数は一般人である。今回対象とした雑誌記事でいえば所謂ビジネスマンである。それで、当然のことであるが記事内容はビジネスに関連することであり、『韓非子』の扱いかたも中国の戦国時代或いは日本の江戸時代とは異なってくるのである。どのように異なるかと言えば、『韓非子』と政治との分離である。『韓非子』の脱政治化である。『韓非子』の基本として弱体化した韓をいかにして生き残らせるかという目的が存在するが、それが生き残りだけではなく富国強兵の政策にも応用可能な理論であったため、秦の始皇帝に賞賛され、また事実、秦が成功したため、以後、富国強兵の書として認知されるようになった。日本でも同じように認識されてきた。初期に設定された「弱体化した韓」或いは「中国を統一した秦」の部分のをそれ以後の為政者達が自分の権力の及ぶ国、地域、或いは範囲に置き換えて『韓非子』を読み継いできたのである。したがって『韓非子』の書物としての意義は韓非の時代と何ら変化することなく受け継がれてきたのである。ところが、現代日本では対象読者が変わり、脱政治化することによって、本来は政治的な目的を達成するための方法論の中で直接的に政治と関連しない三次的、四次的な方法論が単体で扱われることが可能になったのである。つまり、例えば、説難篇等では、以下のような階層がある。

テーゼ：生き残り・富国強兵（政治的目的）

階層1：目的達成のための政策の立案（一次的方法論）

階層2：政策実現のための政策の進言（二次的方法論）

階層3：進言採用のための君主を説得（三次的的方法論）

階層4：説得を成功させるための注意（四次的的方法論）

これが、『韓非子』の脱政治化が図られたことによって階層2までは現代日本社会の『韓非子』読者間では実質的な意義を失って消失してしまった。この上位階層の意義消失によって、三次的方法論は「進言採用のため」そのものを目的

とした説得の方法論⁽¹⁰⁾として、四次的方法論は「説得を成功させるため」それ自体を目的とした注意事項として、それぞれが独立して目的と手段という個別のパーツで意義を持つようになったのである。この独立した方法論への着目が現代的視点であり、江戸時代までは表立って言われなかった所謂処世術（個別の目的に対して個別の方法論）を説くイメージを『韓非子』に付与することになったのである。説難篇は臣下の立場で書かれた篇を代表する篇の一つであるので、自らのアイデアを自らが実行する権利を持たない立場の者、他人に自らを職務上指揮する権利を持たれている立場の者にとっての方法論が多く内包されている。説得の方法論はまさにその最たるものである。これが説難篇がビジネス記事に多く取り上げられる要因の一つであることは確かである。

実は、二柄篇も説難篇と図式は同じである。二柄篇は先にも述べたとおり君主は賞罰の行使権を譲渡委任してはならないことを言い、同時に臣下の統御術を説く篇であるが、やはり脱政治化の視点で捉え直されたため政治的でない方法論が個別に言われるようになったのである。二柄篇のそれは即ち所謂「飴と鞭」のノウハウを中心とした権力者としての組織運営の方法論である。君主の立場で政治的成功を標榜して考えられた政治的方法論は組織運営そのものを目的とした方法論として捉え直されたのである。したがって、その代表的な篇である二柄篇がビジネス記事では多く引用されることになったと言える。

ビジネス記事は記事の執筆者はビジネスに役立つであろうこと、読者が興味を持って読むであろうことを中心に記事を書く。したがって『韓非子』が政治の書であるという前提を無視すれば『韓非子』に記されている文章は執筆者が恣意的に利用できるのである。それが内・外儲説の引用の多さの理由である。しかしながら、説話そのものは補助的な役割しか果たさないもので、ビジネス記事には内・外儲説を引用して言いたかった他のものがあつたと考えられる。引用数から考えると五蠹篇がそれであると考えられるがそうではない。五蠹篇は元来『韓非子』の中心的篇であり、『韓非子』の説明には不可欠であるから、ビジネス記事に限らず自ずと引用も多くなるのである。このように考えるとビジネス記事から『韓非子』について何らかの特徴を指摘するとすれば、それは説

難篇と二柄篇からの引用の多さであり、ビジネス記事が『韓非子』に見いだした意義は上述した立場の異なる両者のための方法論と言うことが出来る。

いちおうの結び

本稿では、教育、新聞、ビジネスそれぞれの分野で言及される『韓非子』に関する記述を追って、それぞれの分野における特徴や傾向を明らかにし現代社会と『韓非子』の関係について考察を加えた。教育の分野では、中学校では『韓非子』即ち「矛盾」と言ってよく、高校では『韓非子』は主要の五蠹篇と、二柄篇、説難篇、外儲説の3篇の特定の一段が多く取り上げられ、『韓非子』の基本的性格や思想が学習できるよう配慮されている。注目すべき点は、江戸時代から言われる「刑名参同」「現実重視」という理解のほかに処世術を説く書という理解が加えられていたことである。新聞では引用される篇や内容については一定の特徴や傾向はみられなかったが、政治関係の記事での引用が多いという傾向が見られた。これは『韓非子』は政治の書であるというイメージが記事の執筆者にあってそれに影響された結果であると考えられる。一方、ビジネス記事では『韓非子』の基本理解のためには従来通り五蠹篇が引かれたが、記事の本論では『韓非子』は政治の書であるという呪縛を解放し、『韓非子』中にある無数の方法論がビジネス記事の都合によって個別に引用されていた。なかでも中心を為すのは、組織の下位に位置する者向けの説難篇にある説得の方法論であり、上位に位置する者向けの二柄篇の統御の方法論である。これは日本のビジネスにおける組織内人間関係の重要度が高いことを反映した結果とも言える。

以上から現代社会における『韓非子』を考えると、『韓非子』の基本的説明は五蠹篇で行われ、説話は外儲説から引用、処世術としては説難篇、「刑名参同」は二柄篇が代表例という一応の理解の在り様が窺える。そして『韓非子』全体のイメージは政治の書であり、『韓非子』の文章の引用は政治的事象について行われる傾向がある一方で、実際にノウハウとして読まれる場合には脱政治化が図られていて恣意的な引用が行われるというのが現状である。したがって、現

代社会における『韓非子』の意義について考えると、方法論や説話の宝庫とはいえるが、『韓非子』内部にそれをダイレクトに社会に向けて積極的に発信するエネルギーは現代には存在せず、その方法論や説話を必要とする『韓非子』以外のものによって外部から規定されているといえる。つまり、現代社会における『韓非子』の意義というのは『韓非子』自体に内在するのではなく、『韓非子』の説話や方法論を利用しようとするものの思惑がそれに当たるのである。したがって現状のまま現代的意義を重視すると『韓非子』研究は説話や方法論の正しい理解といった極めて小さな研究にならざるを得ない。そう考えると現代的意義については、現状の学問的意義から見ると全く無視するというわけにはゆかないが、神経質になる必要性もないように思われる。しかしながら、学問的意義などは全てが不透明な時代において現在の学問的意義と明日のそれとが同じである保証はなく、また今日の大学をとりまく環境は純粹に学問的要因ではないにせよ現代社会と積極的に連携を図らなければならないことに疑いの余地はない。こう考えると古典研究と現代社会とを結びつける要素のひとつとして、現代的意義は古典研究に携わる者が現在まず第一に考えなければならない課題なのではないだろうか？

注

- (1) 拙稿 「江戸漢学における『韓非子』の意義」『哲学年報』第56輯 1997.3
- (2) 入学試験に古典を課す大学の入学試験にも『韓非子』は登場するが、選抜試験という性格上、『韓非子』の性質よりも出題の都合が優先されているので、今回は考察の対象から外した。
- (3) 『国語の研究』第十八号及び第十九号 大分大学国語国文学会発行
- (4) 一般的に国語一は一年生で、国語二或いは古典一は二年生で、古典二は三年生で使用する。
- (5) 旺文社、角川書店、教育出版、三省堂、尚学図書、第一学習社、大修館書店、筑摩書房、明治書院、右文書院。
- (6) この説話は儒家批判の説話であるが、儒家が批判されるのは過去の教義に固執して現実に則した説を提出しないことに在る。
- (7) この説話の本意は、たとえ飢饉であっても国家に貢献無しに食料を人民に与えれば法の絶対性が損なわれ国が乱れるとして『韓非子』の法の執行に対する厳格をいうことにあるが、新聞記事では飢饉でも国家による食糧配給が行われない北朝鮮を非難する意味あいで使用されている。
- (8) 前掲載論文 「江戸漢学における『韓非子』の意義」を参照されたし。
- (9) 「大宅荘一文庫」の所蔵する雑誌はおよそ6千種類、20万冊であり、考察対象の母体とするのに十分であると考えられる。
- (10) 勿論、君主は現代社会には存在しないので、進言する者に対して権力を行使することが出来る者、具体的には職場における上司等に置き換えが行われる。